

Title	上海版『独立新聞』の発行に伴う印刷メディアの導入とその展開
Author(s)	劉, 賢国
Citation	デザイン理論. 2012, 59, p. 96-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53544
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

上海版『独立新聞』の発行に伴う印刷メディアの導入とその展開

劉 賢国／筑波技術大学

はじめに

今日まで中国において韓国独立運動と関連して発刊された新聞、雑誌は、この地域の独立運動史を研究する過程で部分的に言及されてきた。しかし、ひとつの出版物が無事発刊にこぎつけるためには、原稿執筆、資金調達、活字製作、印刷、検閲など様々な過程を経る必要があった。筆者の見るところ、韓国人らが中国でどのようにして韓国語、漢字の活字を製作し、備えたかについての背景や経緯、また、その活字がどういった製作所で铸造され、どのような印刷所で発刊されたのかに着目した研究は皆無である。特に近代活版印刷の発祥地としての上海地域における、韓国人による韓国語、漢字活字で発刊された新聞と雑誌について、単一主題で扱った研究論文は発表されたこともない。

しかし1992年中国との国交が樹立された後、中国の各所で独立運動と関連した多くの資料の発掘、収集が進められ相当数の新聞と雑誌が資料集として発刊された。だがそれでもまだ近代印刷活字史の観点から上海での発刊事実や名前さえ把握できずにいるものが少なくない。またその間の研究や資料収集も部分的に形成行われたもので、全体的な実状や規模がほとんど把握されていないのが現状である。

本稿では、上海で独立運動と関連して発行された新聞、雑誌の実状を、精査し紹介する。そして何よりも発刊された新聞、雑誌の活字印刷会社の実状と輪郭を把握することを先行課題として設定する。特に上海版『独立新聞』に対する個別的な分析と印刷活字史に関連した内容を中心にして明らかにする。

1. 中国における『独立新聞』の創刊の背景と意義

上海大韓民国臨時政府が発行した上海版『独立新聞』は2種類、重慶版『独立新聞』は1種類であり、実際に発刊された『独立新聞』は3種類であったことが調査、検証を通して証明された。ちなみに中国での『独立新聞』の影響で後に韓国国内で純韓国語版『独立新聞（1896～1899）』が最初の民間紙として発刊された。したがって、中国で発刊された『独立新聞』の3種類と韓国国内で発刊された『独立新聞』を合わせると『独立新聞』は全部で4種類が発刊されたことが明らかになった。

①上海で発行された韓国語と漢字の混植版（1919～1926）、②上海で発行された中国語版（1922～1924）、③重慶（Chongqing）で発行された中国語版（1943～1945）、④『獨立新聞』の韓国語版。韓国国内（1896～1899）

2. 上海版『独立新聞』のタイポグラフィデザイン

1) 活字の開発

精製する他に大きいことは『独立新聞』発行と民族運動の巨頭を集めることであった。『独立新聞』は問題無しで発行された。チョの苦心で韓国語の字母（子母音字）も製作され、アメリカの「韓国民会議」の団体から資金も調達された。しかし問題は巨頭らの会合だった。『趙東祐平転（2007）』という文の中で、チョの小手先の利く作業により字母（母型）を作ることができ、独立新聞を発行できたということが分かる。チョは記者としての

勤めだけでなく印刷技術までも兼備していた人物であった。手先の器用なチョは、韓国語の聖書の活字を一文字一文字ずつ印刷物から切り離し、中国人技術者に作業を依頼して写真の銅板に焼き付け、母型を作って、4号活字を鋳造した。

2) 印刷動向

朱耀翰は上海で韓国語の聖書から活字を選び「商務印書館」に字母(母型)を制作するために、使用頻度調査を行った後、手動鋳造機1台と中国人の鋳造工1人を準備した。そして職工志願者の数人と文選練習を開始した。しかし彼らは韓国語を知らないことから、見覚えがない文字は字数を数えて推察でその順に漢字と混ぜていく。そのうちに「サ(サ)」を「伏(ボック)」に見違い、また「ス(ツ)」を「立(リッ)」字と見違えて、ある1文字が違うようになればその以下は全部が怪文になってしまうこともあった。チュは原稿を使って文選・植字・組版・校正と差し換え、印刷までした。

3) タイポグラフィ

上海版『独立新聞(1919~1926)』創刊当初は、韓国語の文章が漢字中心の縦書き・縦組みから韓国語の中心の縦書き・縦組みに移行して、後の韓国国内外の新聞の組版に多大な影響を与えている。

①タイトルは、創刊の当初は漢字表記の楷書体の『 독립신문』から韓国語表記の楷書体の『 독립신문』に変わる。②版面サイズは、340×236mmであり、各余白は、天(20ミリ)、地(20ミリ)、ノド(15ミリ)、小口(15ミリ)となっている。③ページ数は、基本的に4ページであり、記念特集の場合は、8ページで刊行された。④本文は、5号(4ミリ)の韓国・漢字活字が主に使用されているが特集号には、4号(5ミリ)の韓国・漢字活字が使用されている。168号(1923年12

月26日)からの活字改良の社告を載せている。『独立新聞』時代から『 독립신문』のタイトル変更に伴って1回の活字の改良が行ったことが興味深い。

⑤見出しは、漢字の2号(8ミリ)、3号(6ミリ)、4号(5ミリ)が使用されているが169号(1924年7月1日)から、ゴシック体の3号の韓国語活字と4号(5ミリ)楷書体の韓国語活字が併用された。また約物類は、日本の縦組み版と同じようにコンマ(,)句点(.)が使用されている。段組みは、基本的に6段縦組みでページによっては3段縦組みも使用されている。1段の文字数は、6段縦組みの場合、韓国語・漢字活字の混植文で15字、3段縦組みの場合、30字である。

4) 柳宗悦の業績

柳宗悦の文は『日本読売新聞』1919年5月20日から24日付7面に「朝鮮人を思うこと」という題名で5回連載された。「朝鮮人を思う」が少なくない反応を呼び起こして、『東亜日報』は柳宗悦夫婦を朝鮮に招請し、1920年4月19、20日付2面に相次いで彼の文「朝鮮人に呈する書」を掲載した。この文は日帝の掲載禁止措置を受けて、2回連載を最後に中断された。以後、上海の大韓民国臨時政府は、連載が中断された『東亜日報』の記事を上海版『独立新聞』に5回(第1回(第82号1920年6月5日4面)、第2回(第83号1920年6月10日4面)、第3回(第84号1920年6月17日4面)、第4回(第85号1920年6月22日4面)、第5回(第86号1920年6月24日4面))にかけて掲載したことが資料の検証により明らかにした。

※本研究は科学研究費補助金(基盤研究(C))日韓「多言語」文献・資料調査の研究(21520124)の一部として行われた。